金沢美術工芸大学の版画教育

Notes about the Education of Print at Kanazawa College of Art

神谷　佳男
KAMITANI Yoshio

はじめに

金沢美術工芸大学は2023年度の移転に向け、新キャンパスを建設中である。そこには所属する専攻や専門分野を超えて学生たちが利用できる「共通工房」があり、自由に制作が可能だという。

新キャンパス移転を控え、本学のこれまでの版画教育について記録にとどめたいと考えた。ただ本学に版画専攻がなかったこと、版画の授業に特化して記録し管理する人がいなかったこともあり、十分な情報がないことを最初にお断りしておく。しかしそれを補って余りあるものは、受講学生たちが提出していった夥しい数に及ぶ版画作品である。

1996年11月発行の『金沢美術工芸大学50年史 開学50周年記念』には、専攻の授業内容や非常勤講師についての記載がみられる。また本学の「学生便覧」には、その末尾に年度ごとの開講授業科目概要が添付されていた時期があり、資料として活用した。ただし本学事務局で保管している「学生便覧」は1978年度からで、そのうち開講授業科目概要の添付があるのは1990年度まで、翌年度より３年間はその添付がなく、次に登場するのは1994年度の『授業科目案内』であった。３年間の空白があるが[1]、ここでは『金沢美術工芸大学50年史 開学50周年記念』、「学生便覧」、それに『授業科目案内』を主な情報源として本学における版画の授業の歴史を遡る。

次に版画教育について本稿ではどのように解釈し取り扱うべきかを考える。版画教育とはすなわち版画制作の授業であるとの考えに異論はないとしても、それだけにとどまるものではない。本学美術工芸研究所所蔵の版画作品コレクションを活用した版画展、本学附属図書館所蔵のオリジナル版画を含む版画集や版画関連図書、さらには版画に関する調査・研究やその成果発表などは、学生にとって広い意味での版画教育と見なすことも可能であると考える。

そこで以下の３つの事柄を中心に、版画教育について述べていくこととしたい。

1　版画の授業について
2　版画作品展について
3　版画に関する調査・研究について

1　版画の授業について

1-1 はじめての版画の授業

本学で版画の授業が初めておこなわれたのは何時か。『金沢美術工芸大学50年史 開学50周年記念』には1960～61年（昭和35～36年）、産業美術学科商業美術コース（現視覚デザイン専攻）の非常勤講師として関野準一郎[2]の名が掲載されている。

デザイン専攻が本学で初の版画の授業をおこなったということに対して違和感を抱くかもしれないが、商業デザイン美術コースと呼ばれた時代から商業デザイン専攻、そして今日の視覚デザイン専攻に至るまで、同専攻では「材料学・印刷」、「材料学(印刷)」のなかで実技の版画の授業が継続的におこなわれてきた。

筆者が本学に着任した1994年度には商業デザイン専攻所属の嵐一夫教授がドライポイントやメゾチン

［キーワード］銅版画　共通造形センター　アブラアム・ボス

トの凹版画技法の授業をおこなっていた。

銅版画プレス機を自専攻の備品として所有し使用していたし、大日本スクリーン製の自動オフセット校正機を管理し、印刷の授業でその大きな印刷機を活用していた時期もあった。そして今日まで綿々と続けられているスクリーンプリント関連の授業も実施していた。版画に対する強い関心が認められるデザイン専攻で関野準一郎が本学の最初の版画の授業をおこない、その内容が銅版画だったことは間違いないであろう。

1-2 油画専攻の版画の授業

絵画専攻油絵は、1982年（昭和57年）度から本格的かつ継続的に銅版画の授業をおこなってきた。『金沢美術工芸大学50年史』[3]によれば、堀井英男が1982年（昭和57年）から1991年（平成３年）まで３年生の「版画実習」を、大沼正昭が1990年（平成２年）から1993年（平成５年）まで２年生の「版画Ⅰ」を、そして戸田俊郎が1991年（平成3年）から1993年（平成５年）まで版画実習を担当したと解釈できる記載がある。1983年度『昭和58年度 学生便覧』によると、堀井英男が学部３年次の授業科目「油絵実習」のうち「e. 版画実習」を担当していた。[4]

堀井英男の名前が登場するのは、『金沢美術工芸大学50年史』には1982年から、一方「学生便覧」の開講授業科目概要では1983年度からとなっているが、1982年度に堀井が金沢に非常勤講師として実際に授業をはじめ、その後次年度の予算を確保し、翌年の開講授業科目概要に彼の名を書き加えたと考えられる。1982年度に制作された学生の銅版画作品が保存されていることからもこのことが裏付けられる。

そして1990年度の『平成2年度 学生便覧』には、２年次の「油絵実習」に大沼正昭が、３年次の「油絵実習」には堀井英男の名が記載されている。[5]これは同年度に学年の異なる学生を対象にした版画の授業が開講されていたと考えられ、油絵専攻の版画に対する重視度が見てとれる。1990年以前から既に学部２年、３年、修士１年の３学年を対象とした版画制作の授業がおこなわれていたと思われるが、残念ながら教務的資料がなく、また「学生便覧」や『金沢美術工芸大学50年史』が授業内容の詳細を明確に伝えているわけではない。現在筆者が担当している「版画Ⅰ」及び「版画Ⅱ」はそれぞれ油画２年生の銅版画、油画３年生を対象としたリトグラフの授業であり、油画修士１年生を対象とした「絵画技法演習」は６週間のうち３週間が版画制作の授業であることから、同専攻内の大学院生を含めた３学年の学生を対象とした授業形態は30数年前の授業形態と全く同じであり、今日まで一貫して継続している油画専攻の版画教育と言えよう。

蛇足だが、油絵専攻で銅版画の集中授業が開始される数年前の1970年代後半にリトグラフ用プレス機[6]が購入されたが、現存する版画作品からは1980年代に油絵専攻でリトグラフの授業がおこなわれた形跡はない。

1-3 芸術学専攻の版画の授業

1986年（昭和61年）本学に新たに設置された芸術学専攻においても大沼正昭、吉岡弘昭、戸田俊郎といった非常勤講師が、1987年（昭和62年）度からエッチングとドライポイントを中心とした銅版画の授業を担当していた。[7]このことは『金沢美術工芸大学50年史』の文献資料からだけでなく、油絵専攻同様、芸術学専攻の学生たちが制作した銅版画作品がまとまった数で現存していることからも銅版画の授業の存在が裏付けられる。いずれにせよ芸術学専攻では油絵専攻と同様、銅版画の授業が継続的におこなわれていたことは間違いない。

1-4 教職関連の版画の授業

中学校や高校の「美術」や「工芸」の教員免許を取得する場合、学生たちからは中町先生と呼ばれていた一般学科所属の士農進が1996年度まで担当していた「デザイン実習」または「デザイン」[8]の授業のなかに版画実習が組み込まれていた。例えば、1985年の「昭和62年度 学生便覧」82頁と『金沢美術工芸大学50年史』に城所祥の名がある。城所の担当は版画実習とあるが、「デザイン実習」の中の版画実習であ

り、城所の集中授業は1979年から1988年まで行われたようだ。1979年度、1980年度の「学生便覧」の開講授業科目概要に城所祥の名前は記載されていないが、当時はまだ非常勤講師の情報などを詳しく掲載する習慣がなく、あくまで授業内容の概要をまとめる程度だったからだと思われる。1989年度の『平成元年度 学生便覧』からは城所祥に代わって伊東正悟の名が挙がっている。[9]

1-5 共通造形センター授業

1993年(平成５年)、学内組織として共通造形センターが発足。[10] 全専攻共通の実技として銅版画の授業がおこなわれることとなった。『平成６年度 授業科目案内』には、今井治男、戸田俊郎、大沼正昭、山本桂右、筆塚稔尚の非常勤講師名[11]が列挙されているが、前年度の1993年度に一斉に始まった版画の授業を担当した非常勤講師の名がそのまま掲載されたためである。

1994年度（平成６年度）からの銅版画の授業「版画Ⅰ」は、1994年５月に着任した筆者がこれ以降、絵画専攻（日本画)、絵画専攻（油絵)、彫刻、芸術学、商業デザイン（現視覚デザイン)、工業デザイン(現製品デザイン)、工芸科の専攻ごとに２年生全員に10日間の銅版画の授業を担当することになる。その後、授業日数に関しては専攻の事情により８日間から10日間と若干の違いがあるにせよ、彫刻専攻４年生を対象にした「版画Ⅱ」や油画専攻内の授業として３年生と修士１年生の版画実習も加わり、大学の中で銅版画の授業は大幅に増えた。

上記の通年の専攻ごとに受講する銅版画の授業とは別に、共通造形センター集中授業と呼ばれていた３週間の授業では、1998年度から2006年度までの９年間、山本桂右が「絵画Ⅱ（リトグラフ)」を、2007年度は大下百華が「絵画ⅡB（木版画)」を、2008年度から2011年度までは門馬達雄が「絵画ⅡB（リトグラフ)」をそれぞれ非常勤講師として担当した。2012年度から履修の方法が変更され受講生が増加たことで授業内容をリトグラフから銅版画に変更し、また授業科目名が「絵画Ⅱ（版画)」となった。

2000年度入学生からカリキュラムの変更があり、通年の銅版画の授業だった「版画Ⅰ」が「絵画Ⅱ(版画Ａ」に変更され、全専攻必修科目でなくなった。また学内組織の共通造形センター自体も2010年度の公立大学法人移行時に解体した。ただ３週間の集中履修という授業形態だけはその後も存続することとなる。

1-6 現在の版画の授業　概要と版画材料

現在、前述の共通造形センター集中履修期間の３週間（15日間）は、前半と後半の７日半ずつに二分し、毎年５月から６月にかけて実施している。銅版画は「絵画Ⅱ（版画)」という授業科目名で、前半を製品デザイン１年が、後半を視覚デザイン１年が必修授業として受講している。

2012年度から2013年度まで、釣谷幸輝に、2014年度から2019年度までは竹内佳奈に、そして2020年度、2021年度には岩瀬貴憲に「絵画Ⅱ（版画)」の非常勤講師を依頼した。通常は５月から６月にかけての３週間行われる集中授業だが、2020年度は新型コロナ感染により、例外的に９月末に終日の集中授業となった。

この３週間の集中授業とは別に８日間の「版画」の集中授業がある。かつては凸版、凹版、平版、孔版と版種を毎年変え、４年間で四版種すべてを学べる授業形態だった。2006年度と2010年度に木版画の「掘り進み法」で大下百華が、2012年度リトグラフで門馬達雄が、2013年度には竹内佳奈が非常勤講師として担当した。今日、「版画」は銅版画の授業内容になっており、筆者が担当している。

この他、８日間の集中授業「版画Ⅰ」と「版画Ⅱ」がそれぞれあり、前者は油画２年の銅版画の授業、後者は油画３年のアルミ板を用いたリトグラフの授業である。また芸術学専攻内の「絵画演習」は、リトグラフやスクリーンプリントの制作を組み入れた授業で、芸術学２年生が受講する。

まだパソコンやインターネットがそれほど普及していなかった1993年の共通造形センター発足当時、印刷と言えば凸版、凹版、孔版、平版の四版種を説

明するだけで十分な時代だった。その頃と比較すると、今日では安価になったインクジェットプリンターが普及し、インターネット経由で複数の画像を一瞬にして世界中で送受信できる時代へと変化し、版画の授業の意義も変化している。

授業初日の数時間、パワーポイントを用いて版画の解説をする。デジタル化のおかげで、ベルギーのアントワープにあるプランタン・モレトゥス印刷博物館の画像を見せて凸版を語り、フランスのルーヴル美術館のカルコグラフィー版画工房の銅版画コレクションを見せながら情報伝達について疑問を投げかけ、かつてパリのムルロ印刷所だったところで現在も現役の19世紀の印刷機がガチャンガチャンと音を立てて回っている動画を見せて印刷文化の話をする。その後、オリジナル版画作品と版木の実見で、非物質性に慣れつつある学生たちにインクや版木の存在感を感じ取ってもらう。

版画制作においては、特定のテーマを与えずに関心ある事柄を自由に表現するよう勧め、可能なら下絵のデッサンを準備してもらっている。授業初日、あるいは２日目に技法解説を兼ねて受講生全員が一枚の版上に思い思いに線を引き、その共同作品を腐蝕させ、エッチングの原理を理解させる。最初の刷りが終わったら、ニードルにルーレットを加えドライポイントの体験をし、さらにはベルソーでメゾチントを部分的に施し、最終的には同じ版上にアクアチントを施して、一通りの作業工程のデモンストレーションをおこなう。その間ドライポイントの繊細なインクの拭き取り作業や油膜について説明する。しかし実際にやってみると、一度や二度の説明だけではインクの拭き取り具合の効果は理解しにくく、時々仕上げ時にインク拭きを個別指導で手助けする場合がある。

版のサイズは着任当初から18×24㎝の銅板を使用しているが、厚さは2020年度後期より１㎜から0.8㎜に変更した。銅の価格が高騰しているためである。

銅版画の授業で使用する材料では、腐蝕液に関しては硝酸から塩化第二鉄水溶液に、グランドは松脂、蜜蝋、アスファルトを混ぜた古典的なものから床用ワックスとリキテックスのメディウムの混合液に、そしてインクは油性インクから水性インクに変更している。有毒ガスの発生や有機溶剤の使用を極力控えるためである。

また大学法人化後に水質検査が厳しくなり、使用するインクは黒に限定している。印刷紙はハーネミューレ紙のナチュラルホワイトのままで変わらない。

実習は、1993年以来現在も研究所棟４階の版画印刷室でおこなっている。受講者数30人の時代もあったが、現在は油画専攻の25人が最大の受け入れ人数である。92㎡のスペースに銅版画プレス機１台、万能プレス機１台、それとパリから東京経由でやってきた19世紀の大型木製リトプレス機１台が作業机とともに所狭しと設置されている。

このほか、金沢市の財団が管理する文化施設「金沢湯涌創作の森」の版画工房を利用することもある。逆に「金沢湯涌創作の森」主催で、本学所蔵の貴重な上記木製リトプレス機と石版石を使用した市民向け講座「リトグラフ」を年１回本学で開講している。これには版画の専門家が遠方より体験に来ることが多々ある。

2020年度は新型コロナウイルス感染防止対策で大学での対面授業が能わず、一部の授業で防蝕被膜を施した銅板をニードルと共にゆうパックで学生の自宅に送り、削り終えた銅版を返送させて大学で筆者が腐蝕させ刷りの作業をおこなうという、前代未聞の対応に迫られた。この授業形態では、受講している学生同士の会話のやり取りもなく、彼らがお互い刺激し合うという教育の場の可能性がなくなってしまうと強く感じた。

２　版画作品展について

ここでは本学学生の版画作品による作品版画展と本学美術工芸研究所所蔵の版画コレクション展について触れたい。

1982年度から一時期を除き今日まで学生たちが授業で制作した版画作品は、5000点以上にのぼる。多くの作品は銅版画であるが、リトグラフや木版画、

そしてスクリーンプリントの作品も含まれる。

筆者は本学着任当初、まとまった数の学生作品が保存されているのを見て、大学の版画コレクションを形成するために継続的に保管されてきたのだと感じた。そこで、版画の授業最終日、受講学生たちに作品提出を依頼する際、版画作品は授業の参考作品として、また将来の版画作品展として利用することの許諾を口頭で求め神谷研究室でコレクションしている。

教職関連の授業で制作されたと思われる1982年以前の学生作品も含めると実に40年以上の期間に及ぶ学生版画作品コレクションとなる。版画の授業とともに今後もコレクションが継続していけば、50年後さらに100年後にははかり知れない価値を持つものに育っていくだろう。

金沢美術工芸大学開学60周年記念 版画展

学生たちが授業で制作した版画作品の展覧会を２度開催した。2006年、本学開学60周年時の「金沢美術工芸大学開学60周年記念 版画展」と、2018年「金沢湯涌創作の森」の湯涌クリエイティブ秋季特別展「版画展－金沢美術工芸大学　神谷研究室所蔵コレクションから－」である。

2006年の「金沢美術工芸大学開学60周年記念 版画展」は、前年夏に共通造形センターの予算申請で企画書を提出し予算を獲得したもので、「金沢湯涌創作の森」で10月29日から11月６日まで開催した。銅版画作品29点、リトグラフ５点、木版画１点、そしてモノタイプ５点の総数40点[12]の展覧会である。開学記念事業の展覧会として、過去20年間に学生たちが授業で制作した版画作品を通して、本学の版画の授業の歴史を振り返ると同時に、版画教育について再考する機会であり、学生たちの成果発表の機会でもあった。[13]

版画鑑賞に充分こたえてくれる質の高い作品がそろった展覧会となったと自負している。図1、2

版画展 ー金沢美術工芸大学　神谷研究室所蔵コレクションからー

最初の学生作品版画展から12年後の2018年９月29日から10月14日まで、「金沢湯涌創作の森」の企画で、湯涌クリエイティブ秋季特別展「版画展 －金沢美術工芸大学　神谷研究室所蔵コレクションから－」を開催した。図3、4、5、6

2006年の版画展同様、授業で学生たちが制作した作品40点で構成され、賛助出品として筆者の作品１点を加え、作品総数41点の展覧会となった。学生作品40点のうち24点は2006年と同じ作品を出展したが、入れ替えた16点の作品のほとんどは2008年度以降に制作された作品である。[14]

リトグラフ版画コレクション展

2007年４月、東京のリトグラフ専門の版画工房「アトリエMMG」で使われていた大型木製リトプレス機[15]が創設者益田祐作より本学に寄贈され図7、その縁で2009年度と2011年度に工房所蔵のリトグラフ版画作品を中心にその他ポスターや書籍など、総数1,000点以上が本学に寄贈された。その膨大な版画コレクションのおかげで2012年４月図8と2013年５月の２回、「リトグラフの魅力 －アトリエMMG寄贈作品－」展を当時金沢市内にあった金沢美術工芸大学アートギャラリーで開催した。

さらに2015年３月にも、数多くのリトグラフ作品と関連写真、それに技法解説とアトリエMMGやパリにあったムルロ印刷工房についてプロジェクターを用いて紹介する大規模な展覧会を金沢21世紀美術館で開催した。同展を見て卒業論文を執筆した学生が現れるほど、影響力のある展覧会だった。図9 16

３　版画に関する調査・研究について

『17世紀フランス銅版画技法の研究 アブラアム・ボス「酸と硬軟のワニスによる銅凹版画技法」』、これは筆者らが５年の歳月をかけて本学美術工芸研究所から2004年３月に出版した本のタイトルである。本学美術工芸研究所ではこれまで、美術の技法や材料に関する調査研究を蓄積してきたが、その方針上にボスの銅版画技法書の翻訳と研究に白羽の矢が

立った。これを機に、フランス17世紀の腐蝕銅版画家ボスの研究に関連する著書や版画作品が収集されることになる。その延長でルーヴル美術館カルコグラフィー版画工房トップのフランソワ・ボードカンやオランダ人版画研究者アド・ステインマンとの研究交流[17]から彼らを金沢に招聘し、2010年1月にボードカンの銅版画のワークショップ[図10]、2017年１月にはステインマンのワインの澱から作る黒インクのワークショップ[図11]をおこなった。講演会の開催と共に、参加した学生たちにとって、このような学術交流は刺激的だったに違いない。さらに同僚とのヨーロッパでの共同調査など、銅版画に関する研究の広がりと深みが授業にも活かされ、学生たちはヨーロッパとの歴史的つながりを感じながら制作に取り組んだのではないかと想像する。

尚、本学にはアブラアム・ボスの「五感」シリーズの版画コレクションや1645年のボスの「腐蝕銅版画技法」初版本から四版・増補版までそろっており、研究者たちにとって貴重な資料となっている。

2020年10月、金沢市内の北國新聞交流ホールで開催された「教材としての芸術資料 －金沢美術工芸大学所蔵の版画・写真・ポスター」展のフライヤー表紙にボスの「凹版画の刷り師たち」(1642年）が使用され、またボスの版画技法書と銅版画が会場に並べられた。

また本学所蔵のゴヤの銅版画「ロス・カプリチョス」の80点のコレクションが近隣の美術館で展示される機会が多いことなど、まとまった版画コレクションのおかげで版画の魅力を伝えられることは、版画教育に大いに貢献していると言えるだろう。

おわりに

共通造形センターが大学内で機能しはじめていた1990年代半ば、本学に入学する全学生が受講する必修授業科目数は多くあり、その中に銅版画の授業が含まれていた。しかしその頃は既に日本の経済力が80年代後半に比べ世界の中で低迷し始めており、日本企業が余裕を持って社内研修で人材育成ができなくなりつつある時代であった。そのため卒業する学生には即戦力が求められる傾向が強まっていた時期でもあった。しかし、共通造形センターの学内での位置づけは、実技における一般教養的な役割を担っていたのであり、実社会の要求とは一線を画すものであったと考える。

版画という媒体が情報を正確に伝える手段として、ナポレオンがいち早くリトグラフの印刷術を利用した話を授業でする。一方で電気伝導率の高い銅が産業とも深く結びついていて、例えばインターネットのクラウドサービスに使用されるデータセンターには大量の銅が使用されている、という今日的な話も加えている。

印刷の側面を持ち備えた銅版画はまた独自のマチエールを備え、描画をしながら銅という素材との格闘を通して自己省察・自己表現を実現するものであると考える。

素材との格闘から生まれる技術、技術と意志から生まれる創作活動、そして創作活動を通して生じる体のリズムとの一体感。銅版に線を刻むときに感じるリズムは、身体に内在するリズムと呼応する。

デューラーやレンブラント、ゴヤ、マティス、ピカソ、アンディ・ウォーホルなど著名な多くの芸術家が版画作品を制作し、世界中の美術館がそれらを所蔵している。

ルーヴル美術館の版画工房にある銅版画の原版コレクションが数世紀にわたって今日まで大切に伝えられてきたように、版画の重要性が新キャンパスにおいても長きにわたって受け継がれていくことを切に願う。

図１、図２　2006年の「金沢美術工芸大学開学60周年記念 版画展」の展示会場

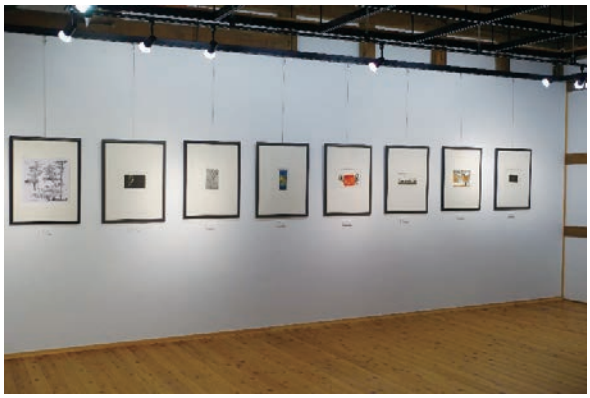

図３、図４　2018年の「版画展 ー金沢美術工芸大学　神谷研究室所蔵コレクションからー」の展示会場

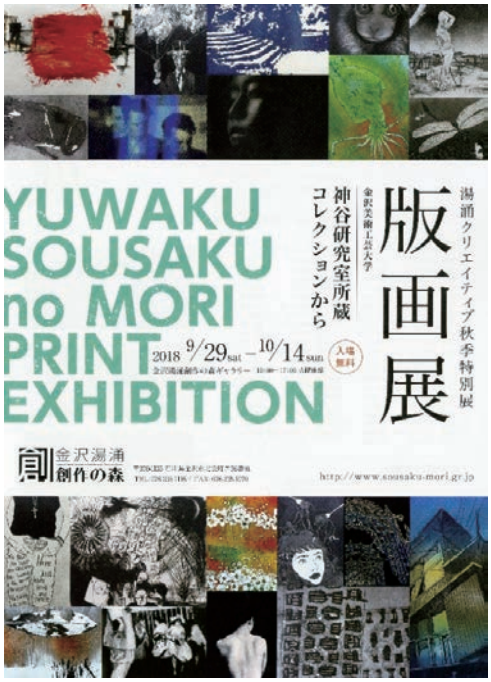

図５、図６　2018年の「版画展 ー金沢美術工芸大学　神谷研究室所蔵コレクションからー」のフライヤー

図７　2008年５月大型木製リトプレス機の寄贈後、市民向けに開いたお披露目会

図８　益田祐作のギャラリートーク

図９　金沢21世紀美術館の展示の様子

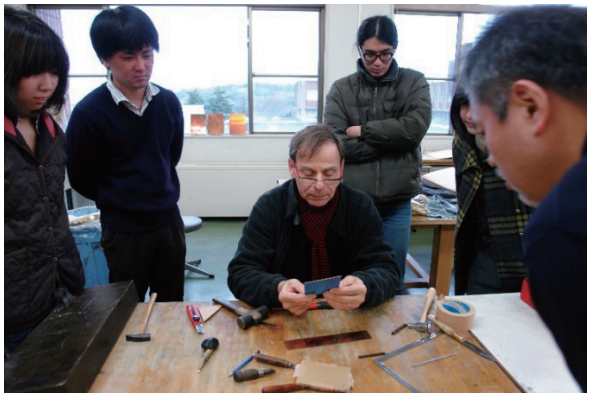

図10　ボードカンの銅版画のワークショップ

図11　アド・ステインマンのワークショップ

註

1　本館棟1階事務局の書架に保管されている「学生便覧」は1978年度(昭和53年度)から今年度までである。それ以前の学生便覧にも開講授業科目概要の資料が添付されている可能性はあるが、確認はできない。「学生便覧」の開講授業科目概要の添付は、残念ながら1991年度の『平成３年度 学生便覧』以降なくなってしまった。現在は1994年度(平成６年度)から発刊されている「授業科目案内」のおかげで本学での授業内容の概要を知ることができる。ちなみにシラバスと呼ばれているこの「授業科目案内」は2018年度まで紙媒体で発刊されていたが、2019年度からデジタルデータ化された。

2　『金沢美術工芸大学50年史』(平成８年11月７日発行、発行所 金沢美術工芸大学)には版画家 関野準一郎(1914-1988)が非常勤講師として昭和35年～昭和36年「版画実習」を担当したことが書かれている。(136頁)
尚、非常勤教員一覧に「関根淳一郎　版画(商業デザイン専攻)」とあるが、正しくは「関野準一郎　版画（産業美術学科商業美術コース)」ではないかと思われる。(同、343頁)

3　同上書、 86～87頁

4　堀井英男（1934-1994）が担当したと思われる版画実習は『昭和58年度学生便覧』84頁にある。当時のカリキュラムでは絵画専攻油絵の３年次の授業科目である「油絵実習」は12単位の通年の授業であり、その中でさらにa.b.c.d.eと授業内容が細分化されて記載されている。ちなみに「e. 版画実習」では、以下のように記述されている。
版画における技術の正しい知識と基礎的技法の習得を基礎として、版画の特質である複数性、平面性の意味を考え、さらに今日の複製技術時代にマッチした複数芸術（版画）として、表現の可能性を探る。

5　『平成２年度　学生便覧』、95頁

6　現在本学には、岩佐鐵工所製のリトプレス機が２台ある。プレス機には以下の情報入ったプレートが付いている。
高級印刷機械製造　株式會社　岩佐鐵工所
大阪市東成区大今里２丁目４番24号
電話　大阪(097) 0741番 0742番
尚、本プレス機購入にはエピソードがある。本学出身の筆者が学生時代、小型の銅版画プレス機が大学にあったことは記憶にあるが、リトグラフ用プレス機は当時なかった。クラスメートの仲間と油絵専攻の教員にリトプレス機の購入をお願いしたものの一向に話が進まず、結局事務局の職員に我々学生有志が直談判しリトプレス機を購入してもらったという思い出である。予算申請から購入まで手続きがしっかりしている今の時代からは想像しがたい事態であるが、また当時としても異例だったといえるかもしれないが、しかしそれは、クラスメートの仲間が元気だったことに加え学生運動の嵐の余韻がその当時我々の上の世代の大学関係者たちの脳裏にまだ鮮明に残っていたおかげかもしれない。学生を無視し続けたら何をしでかすかわからない連中と我々の態度から映り、学生運動の悪夢の再来を連想させたのではないかと思うからである。当時、石版石１枚とリトプレス機１台を大学で購入してもらっただけで何もなかったが、金沢市内の印刷屋を回り、使用しなくなった石版石を無償で譲り受け、自転車に乗せて大学まで運んだ。ローラーやその他必要なものは少しずつ自前で買い揃えていった。いまではそれらの物品を大学が購入してくれるだろうが、当時の年間授業料と同額程度の個人出費をリトグラフに注いだという記憶がある。当時学部4年生だった我々は、後輩の新入生たちに何とかリトグラフの技術を伝承しようと必死だった。その後、石版石を使ったリトグラフの授業がおこなわれたという痕跡はなかった。

7　芸術学専攻の非常勤講師について書かれている頁に大沼正昭（1953-）、吉岡弘昭（1942-）、戸田俊郎（1953-）の３名の名前があった。(『金沢美術工芸大学50年史』、113頁。)
またこの３名は非常勤教員の項にも掲載されている。ただ大沼正昭は昭和63年から平成５年(1988～1993年)まで、吉岡弘昭は昭和63年から平成６年(1988～1994年)、そして戸田俊郎は平成２年から平成５年(1990～1993年)まで務めたことになっているが、ここからの情報だけではそのうち誰が油絵専攻の授業を担当したのか、どちらが芸術学専攻の授業だったのか把握しきれない。(『金沢美術工芸大学50年史』、341～348頁。)

8　1978年度の『昭和53年度学生便覧』には「Ⅸ 昭和53年度開講授業科目の概要」が51項から88項まであり、62項には「デザイン実習」がある。その時の担当者は士農進、授業概要が以下、ア、イ、ウの項目で書かれている。ウの項目の木版画制作を城所祥（1934-1988）が非常勤講師として担当したのだろう。淡いブルーのセーターを着た城所の木版画の授業の記憶が筆者にもある。
　ア　一般基礎デザイン、色彩、平面、立体におけるデザインの理論と実習。
　イ　印刷とデザインの概論と実習、版下作成、レタリング（日本文字、西洋文字についての全般)、印刷の版式（凸版、凹版、平版）の実習と理論、印刷法。
　ウ　印刷応用の美術制作、木版画、エッチング、ジンク版による作品制作と印刷の実際。

9　1990年度の『平成２年度学生便覧』の平成２年度開講授業科目概要には士農進担当の「デザイン実習」に「ウ 多色刷りによる木版画実習。」と書かれ、非常勤講師欄に伊東正悟の名がある。(『平成２年度学生便覧』91頁)
『金沢美術工芸大学50年史』によると、伊東は平成1989年から1995年まで非常勤講師を務めた。木版画担当は、このほか北岡文雄（1918-2007）が1969年から1978年まで非常勤講師をしている。(『金沢美術工芸大学50年史』、340頁、342頁。)

10　平成３年３月５日、組織改革実施委員会がまとめた「造形

共通部の部門の設置について」によれば、平成元年６月10日に答申した報告書第２項に挙げられている「造形共通部門の設置」の実施について、多角的検討を重ねて来た結果として、その具体化をおこなうのが適当であると考えから「共通造形センター」（仮称）の設置が求められた。学内運営上は一つの専攻と同等の資格を持ち、次の５つの意義を掲げる。

①専門化と相俟った共通の場の必要
②共通授業の合理的効率化
③新しい分野への対応
④国際化への対応
⑤今後の学内組織改変に機能する場

また内容と業務欄には次のように書かれている。「基礎教育だけではなく、専門教育を分担する。入学生を取らないが、諸専攻の学生を受け入れ教育・研究を行なう。次の業務を担当する。

①諸専攻に股がる一定の実技授業
②専攻に専門教官が存在しない一定の実技授業
③教職関係の実技
④芸術学専攻の実技
⑤専攻の枠を超えた新しい造形分野
⑥専攻の枠を超えた留学生の受け入れ
⑦共通造形に関する理論

共通造形センターは、本学が４年制の金沢美術工芸大学として発足した1955年（昭和30年）、１年生全員が専攻の枠を超えて４クラス（各約30人）に編成され、石膏デッサン、日本画（毛筆画）、工芸（陶器）、彫刻（塑像）の基礎を順次巡り履修していた頃の授業形態を手本にしたとされる。『金沢美術工芸大学50年史』127頁には「学生はお互いに他専攻の教員や専門の様子に触れる中で幅広い造形教育を受けることが出来た。このことは教育面の成果のみならず、交友の輪が広がった事において今日でも卒業生から高く評価されている。またこのことは、平成５年に発足した、全学交流授業を目指した共通造形センター開設の経験的背景ともなっている。」とある。

尚、共通授業の合理的効率化により、複数の専攻が受講する同名の授業は共通造形センター授業と見なされ、また本学の実技の授業の受講学生数の上限は30人までと暗黙の了解があった。そのため、全専攻共通の実技として銅版画の授業においては、30人以下の受講者数に分けて授業を複数回に分けておこなわれていた。

11　『平成６年度 授業科目案内』44頁の「版画Ⅰ」では次のような表記になっている。（一部省略）

担当教員：（未定）（非常勤）今井治男、戸田俊郎、
　　大沼正昭、山本桂右、筆塚稔尚
対象専攻・学年：全専攻　２年次（必修）
授業の目標又はテーマ：凹版画（銅版画）の表現
授業計画・内容及び形態：
○銅版画（エッチング）の基礎的理論・技法を学ぶ。
○銅版画演習を通して点・線・面のデッサンの問題を考察する。
○10日間

『平成７年度 授業科目案内』46項の「版画Ⅰ」では次のような表記になっている。（一部省略）

担当教員：神谷佳男
対象専攻・学年：全専攻　２年次（必修）
授業の目標又はテーマ：銅版画の表現
授業計画・内容及び形態：
○銅版画の基礎的理論・技法を学ぶ。
　版画作品の紹介
　エッチング、アクアチント、ドライポイント、メゾチントの説明
○各自のスケッチ・デッサンをもとに指導。
　各自の表現したいものに適した技法を考えてみる。
○10日間の演習を通して各自に助言を与える。

12　出品作品の制作年度、専攻・学年、氏名は以下の通り。1987年度：芸術学２年植野比佐見／1990年度：油絵２年若林映月子、芸術学２年水野さや／1993年度：工芸デザイン２年高木千香／1994年度：油絵２年矢野文子、油絵３年岩崎純／1995年度：油絵３年宮崎武彦、商業デザイン２年加藤善夫、工業デザイン土田康剛／1996年度：日本画２年大江育代、油絵３年武藤一樹、彫刻２年高橋圭一、商業デザイン２年大井山恵、清水千恵子／1997年度：油絵３年長内秀興、環境デザイン２年角本大樹、田原紀子／1998年度：油絵２年松尾峰昇、油絵３年小田有里子／1999年度：彫刻４年梶原拓生、門上晋一郎／2000年度：油画３年馬場結、彫刻２年渡部倫子、環境デザイン２年森本香奈／2001年：視覚デザイン２年松井智子、工芸科１年吉田こずえ／2002年度：視覚デザイン２年大正路尚子、環境デザイン２年隅田祐子／2003年度：油画修士１年鄙山右子、工芸科１年山本優美／2004年度：油画３年川田実生、油画修士１年大西佑治、坂本博人、工芸科１年清水悠華、製品デザイン２年斎藤友美／2005年度：日本画２年山下竜司、油画３年秋山真吾、杉坂歩／2006年度：油画３年竹田愛理、渡邊真司

13　「金沢美術工芸大学開学60周年記念 版画展」では、以下の５つの項目について考える機会としてとらえていた。

１）大学での版画の授業の成果の公開
　学生たちがどのような作品を制作したのか、オリジナル作品を通して学外の一般人が知る機会を持つ。また大学の対外的広報活動の一環と考えることもできるが、普段あまり見る機会がない学内の教職員にとっても良い機会となる。
２）版画作品の鑑賞
　保管されている版画作品そのものの質が高く、展覧会を企画し展示するに値すると考えられる。
３）時間や時代の変化について考える機会を持つ四半世紀に及び保管されていることで、25年間の時間の変化を感じ取ることができるのではないかと期待し

た。とりわけ二十歳の学生たちの感性は鋭く、社会で起こる様々な事件や変化に敏感に反応し、それらが作品に反映されている。彼らの時代を感じ取る感性で、我々の生きてる社会の変化を考える一つの機会になれば、と考えた。

4）学生作品の評価について再考する
今秋の展覧会で再度見ることになる学生作品に対して、版画担当教員自身（私）が以前成績評価をおこなった時の結果と今回のように時間が経過した後に再度目にする作品について評価の変化があったかどうか。現在、授業担当者が自己の責任において成績評価をおこなっているが、その判断が正しいかどうか、時間の経過というより客観的な条件を加味して自己検証の機会としたいと考えた。

5）大学の役割の再認識
たとえ政治的経済的な要素によって大学を取り巻く環境が変化し、また世代や時代が変わろうとも、次の世代や時代に作品をしっかり保管継承していくのが、社会における大学の役割の一つだと考える。作品鑑賞を通して、作品が制作された時代について思いをはせ、鑑賞している今現在を考え、また未来の自己や社会を考える礎になりえるのがこれらの作品だと考える。

14　湯涌クリエイティブ秋季特別展「版画展　－金沢美術工芸大学　神谷研究室所蔵コレクションから－」に新たに加えられたのは、以下の学生たちの作品である。
2006年度：芸学２年磯貝明子／2008年度：彫刻２年柄澤健介／2009年度：油画修士１年江口彩音／2010年度：日本画２年割野直弥／2011年度：視覚デザイン２年橋本友貴／2013年度：油画３年須田明子／2014年度：視覚デザイン１年小田文也／2015年度：油画３年大出久美子、永井ちなみ／2016年度：油画２年北島早耶香、芸学２年花補佐真穂、油画修士１年金尾奈留美／2017年度：視覚デザイン１年日下部亜季、製品デザイン１年野副双葉／2018年度：油画３年佐藤晴奈、視覚デザイン１年井出美月

15　拙稿「木製リトプレス機　－アトリエMMGからの贈り物－」『金沢美術工芸大学紀要』第56号、2012年３月、47-60頁。

16　「リトグラフの魅力　－アトリエMMG寄贈作品－」展は2012年４月21日～５月27日、2013年５月18日～６月30日の２回、金沢市片町２-２-５　ラブロ片町３Ｆにあった金沢美術工芸大学アートギャラリー（当時）で開催した。1回目は猪熊弦一郎、大沢昌助、鴨居玲、津高和一、難波田龍起、野見山暁治、李禹煥の７名の作家の約30点を選び展示し、２回目の展覧会では安野光雅、市野英樹、上田薫、上村淳之、大西秀明、大野俶嵩、岡義実、奥田元宋、奥村土牛、小田切訓、小野竹喬、鴨居玲、絹谷幸二、國領經郎、黒沢明、坂本寧、千住博、土屋礼一、富田利吉郎、中島千波、中村清治、那波多目功一、西山英雄、野田弘志、林功、平山郁夫、福沢一郎、三岸節子、渡辺可久、アンドレ・ミノー、ヴァィトリッチの31名作家53点が展示された。１回目の入場者総数は660名、２回目は592名だった。３回目の展覧会は「MMG　リトグラフ版画工房　寄贈作品展」と題して2015年３月７日から３月21日まで金沢21世紀美術館市民ギャラリーＢで開催され、入場者総数は6,308名だった。

17　フランソワ・ボードカン（François Baudequin）
ルーヴル美術館カルコグラフィー版画工房長
アド・ステインマン（Ad Stijnman）
版画研究家、銅版画家

（敬称略）

（かみたに・よしお　版画／芸術学）
（2021年11月５日　受理）